

J. Zachhuber,

Human Nature in Gregory of Nyssa:

Philosophical Background and theological Significance,

Brill, 2000, pp. 271.

柳澤田実

本書は、その表題が示す通り、ギリシア教父ニュッサのグレゴリオスが用いた「人間本性 ('human nature')」という概念について包括的に考察するものである。グレゴリオスはこの概念を、*ἡ ἀνθρωπίνη φύσις, ἡ φύσις τῶν ἀνθρώπων, ἡ ἡμετέρα φύσις*, といった様々な語句で言表しており、その用例は、筆者の Zachhuber 自身が述べているように、グレゴリオスの全著作に渡って多数見出される。また、Zachhuber によれば、グレゴリオスにおいて、これらの言葉は、同時に「人間」それ自体をも意味している。このように「人間本性 (*ἡ ἀνθρωπίνη φύσις*)」が「人間 (*ὁ ἄνθρωπος*)」そのものを指示するということは、*phusis* が、何らかの一つの全体性、すなわち何らかの普遍的な本性 ('universal nature') であることを意味していると Zachhuber は述べる。このような理解を前提とする Zachhuber の目的は、グレゴリオスが、普遍的本性としての「人間本性」に関する理論をどのような仕方で、またいかなる背景に基づいて構築したのかを明らかにすることにある。

普遍的な人間本性に関する先行研究として、Zachhuber は、70年代に出版された Balás と Hübner による複数の著作及び論文を挙げている。対極的な主張をしている Balás と Hübner であるが、Zachhuber が継承するのは Balás の立場である。Balás に先行する Hübner は、それまでの研究史を、普遍的な人間本性をグレゴリオスの中心概念とする点、また同時にこの概念を「プラトニズムの」とする点において批判した。Hübner の研究は、聖書に立脚しない要素を概ねプラトニズムの影響へと回収する従来の教父研究の傾向に一石を投じるものではあるが、結局はその反動として、批判対象である先行研究に従属する結果になっていると Zachhuber は評価する。

Balás の研究は、Hübner が批判した従来の研究史にむしろ積極的に連なるものであり、普遍的な人間本性を、様々な神学的主題、特に罪と贖いの問題において有効に

用いられた概念として積極的に評価している。Zachhuber は、Balás によって規定されたグレゴリオスの人間本性理解をそのまま引き継いでおり、それは以下のようになっている。すなわち、グレゴリオスは、人間本性という概念を、一方で、個々人に等しく内在するモナダ的全体性を意味するものとして用い、他方で、人類全体、すなわち人類の *pleroma* を指示するものとして使用している。そして、この両者は決して矛盾するものではなく、論理的に相互に関連付けられるというのである。本書の試みは、Balás によって提起されたこれら二つの人間本性理解とその両者の相互連関を、より広い射程において捉え直す作業に他ならない。

Zachhuber が、当該の概念の再検討に際して取り上げた文脈には二つあり、それぞれ本書の第一部と第二部をそれぞれ構成している。一つは、当時のキリスト教世界の中心的課題であった三位一体論争であり、もう一つは、創造論から終末論までを包摂する救済論の文脈である。Zachhuber は、グレゴリオスの哲学性を認めつつも、彼の哲学的思弁をあくまでも神学の議論上要請されたものとして理解し、グレゴリオスが上述のような *phusis* 概念を用いた場面を、具体的な神学的議論において抽出しようと努めている。

本書の第一部では、350年代から360年代初頭における三位一体論争が、「同一本質 (*homoousios*)」の問題を中心に俯瞰され〔第一部第一章〕、更にそのカッパドキア教父における展開と、それと普遍的な「人間本性」概念の創出との連関が検討されている〔第一部第二章〕。ニカイア信条において明言された *homoousios* 概念は、アタナシオスに端を発するものだが、この概念に対する諸批判の矛先は、概して、これによって言表される一性に対してではなく、むしろ *hupostasis* 間の 'co-ordination'〔「同等」とでも訳せるだろうか〕にこそ向けられていたと Zachhuber は述べる。そして、このペルソナ間の 'co-ordination' がこそが、カッパドキア教父が重要視した点であるとして、カッパドキア教父とアポリナリオスとの差異化を図っている。すなわちアポリナリオスは、ニカイア信条とペルソナ間の類似 (*homoiousios*) を唱える立場との仲裁を試みたが、カッパドキア教父は、あくまでもペルソナ間の類似 (*homoiousios*) とは相容れない 'co-ordination' を主張する立場を固持したというのである。

このペルソナ間の 'co-ordination' を説明するために、カッパドキア教父たちが用いたのが、人間のアナロジーであり、Zachhuber は、このアナロジーを、三位一体

論と人間本性概念とが接合する場として提示している。このアナロジー自体は、アポリナリオスから継承されたものだが、先にも述べたように、カッパドキア教父とアポリナリオスとは、このアナロジーを用いる意図は異なっている。人間とは個別的に存在するものであるが、同時に *ousia* によって、人間という一つの総体としても存在している。このような人間のあり方は、神にも当てはまり、神の *hupostasis* と *ousia* の関係は、個別的な人間と *ousia* によって一つである人間との関係に類似しているとカッパドキア教父たちは論じた。この *ousia* によって一つの総体として定義される人間を、Zachhuber は本書の中心主題である普遍的な人間本性と同一視するのだが、その内実をより深く理解するために、書簡第三十八番を取り上げている。この書簡では、*pragma* によって個別化された個人人間、そして個人人間の総体としての *phusis*、更に種としての人間が有する *ousia* とが明確に区別され用いられている。この書簡の筆者に関しては、バシレイオスに帰する説とグレゴリオスに帰する説が並存するのだが、Zachhuber は後者を採用する。それはこの書簡で述べられている *phusis* と *ousia* が、前述のグレゴリオスの二つの人間本性理解と類似していることによる。また、他の著作の用例も引きながら、Zachhuber は、グレゴリオスの *phusis* と *ousia* とが限りなく交換可能な概念であることも主張している。

第二部では救済論の文脈が扱われているが、それは人間創造における *phusis* 概念の分析から始められている。この創造論における人間本性理解が、救済論全体の基盤をなすものとされているが、その内容は大変興味深い。Zachhuber の分析によれば、グレゴリオスは、『創世記』(1:27) の解釈として、人間の創造を、先に述べた二重の意味における普遍的人間本性の創造として論じている。すなわち神は、人間個々人に内在する人間本性を創造することによって、種としての人間全体を「可能的に」創造したというのである。この人間本性の創造は「可能的」なものであるから、創造以降の時間的経過によって徐々に現実的なものへと完成されてゆくものである。また、この人間本性は、人間が神の像である限りの神との類似性として規定されてもいる。以上のような人間本性理解においては、人間の墮罪を論じることは困難であるため、墮落が主題化されている箇所では、少なからず当概念の用法の混乱が看取されると Zachhuber は述べる。また、Zachhuber は、このようなグレゴリオスの人間本性理解を、アポリナリオスの悲観的な人間理解と対照し、極めてオプティミスティックだと価値付けている。アポリナリオスにとって、人間は神の恩寵によってしか救われ得な

いものである。しかし、神の恩寵が人間の創造の場面において強力に働くと考えるグレゴリオスにおいては、人間の救済は、神の恩寵が現存する自らの人間本性に立脚することによって実現され得るものなのである。

以上に概観した内容をふまえ、評者として、若干のコメントをしたい。本書は、グレゴリオスの思想の全体を、人間本性概念を基盤に再構築するという大変に意欲的なものである。こうしたヴィジョンに基づく本書は、グレゴリオスの著作を全年代に渡って扱っており、その意味で極めて包括的ではあるが、取りこぼされている問題も確かに存在する。例えば、グレゴリオスの晩年著作に登場する *phusis* の「変容 (*metamorphosis*)」の問題も視野に入れるべきであるし、*phusis* と *ousia* が同義に用いられるということについても、両概念に差異を認める Williamsなどを考慮に入れ、より丁寧な論証が必要だと思われる。また、グレゴリオスをアリストテレスとの連関で捉えようという試みが随所に見られるが、そこでの両者の比較は十分なものとは言い難い。更に、中心主題である三位一体論と人間本性概念の関連についても、後者が前者のアナロジーとして示されたという状況証拠の提示に留まっており、両者が連関することの積極的な意義について掘り下げられていないのは残念に思われる。

筆者の Zachhuber は、1997年にオックスフォード大学で神学の PhD を取得し、現在はフンボルト大学で教鞭を取っている。本書が処女作であるが、今後の旺盛な活躍が期待される学者である。

Emmanuel Bermon,
Le cogito dans la pensée de saint Augustin,
RIV, 2001 or Paris 2001

片 柳 榮 一

この書は表題の如く、アウグスティヌスのコギトの問題を扱ったものであるが、内容は、『三一神論』の十巻をいわば大まかに注解し、難解ではあるが深い洞察のこめられたこの巻の持つ意義を解明することを目指している。コギトを問題とするのであるから、もちろんデカルトのコギトとの類似と相違が中心の問題であるが、それだけ